

かささぎ

通信 第49号

2016年10月14日 発行

どなたでもいつの会でも参加できます

森三郎刈谷市民の会

「森三郎の作品を読む会」

二〇一六年九月の「森三郎の作品を読む会」では、「赤い鳥」昭和9年10月号初出の「三国峠」「鼻」「なぞ」を読みました。

『赤い鳥』昭和9年10月号の三作品はそれぞれ趣の違う作品でした。

「三国峠」（森三郎）は、事情はよく分からないながら、大人の世界の複雑な人間模様を垣間見た主人公の少年（私）の話です。

若くして亡くなった姉の遺児である七歳の甥は、「私」の家に預けられて一緒に住んでいます。ある土曜日に「私」は甥を連れて、山の向こうの甥の父親の家へ泊りがけで遊びに行きました。途中、峠の茶屋の縁台で休んでいると、茶屋のおばあさんとその娘が、事情を知って、甥にいろいろ話しかけます。少しもかまわれない「私」が、悔しさもあって、軒につるした鳥かごの中の頬白を見上げてみると、その娘が「あの鳥をあげるから、帰日も必ず寄ってね。」と親切に言います。しかし、次の日甥の祖母から峠の茶屋に寄らないように言われた「私」たちは、その前を夢中で駆け抜けます。茶屋の母娘のなぜか分からないほどの親切と、「寄ってはいけない」と言われた言葉とが、不気味な気持ちにさせたのです。その一方もらうはずだった頬白のことが、ちよつと惜しくも思われるのでした。後日、峠の茶屋の娘が甥の新しい母親になるはずだったけれど、急に取りやめになったことを、「私」は母から聞きました。

少年らしい興味と、話の裏に流れる大人の事情とを知っていく取り合わせは、「運動会」（昭和9年6月号・森三郎）にも見られました。（「かささぎ通信第44号参照」）

「鼻」（山口信）は、フランス人にまつわる二作のオムニバスになっています。一つはフランスの学者がイタリアの山地へ旅行した時の話、もう一つはロシアのセイントピーターズブルグへ派遣されたばかりのフランスの士官が冬の寒い日に遭遇した話です。どちらも誤解や先入観が創り出した話で、最後にはユーモア仕立ての落ちがあります。この作品の分類は「実話」となっていますから、元にした話題があったのでしょうか。森三郎さんは『赤い鳥』の中に無署名で「昔の笑話」という小咄を載せています。それらの小咄や他の小咄を集めて後に『昔の笑ひばなし』（中央公論社・昭和17年4月）にまとめました。そのあとがきには、江戸時代の咄本の中から「健康な笑ひにみちびく作品」を選びすぐって子供に分かるように書き直したと書かれています。「鼻」に出てくる話のようなユーモアのある話は、得意とするところだったのでだろうと想像されます。

「なぞ」（八島光男）は、今の子どもたちにも通じる話です。いつもお昼のお弁当の時間に三年生の教室へやってくるいたずらっ子の上級生を、ある日、級のみんなで「食いしん坊やアい。」とからかって追い出します。でも調子に乗っているいろいろな言葉を浴びせかけるのを見て、房ちゃんも、みんなで悪口を言ったらかわいそうだと同情したように言うので、桃子は「親類なの？」と聞きます。房ちゃんは「あら、よしてよ。」と怒ったように否定します。みんな一人でからかうのは悪いが、今度は自分がかかわれるのもたまらないという、子どもの心理を描いた作品です。

この話の中には雑誌に載っていた「なぞ」という童話が出てきます。イギリスの「トム・テイト・トット」やグリムの「ルンペルシュテイルツヘン」のような謎かけ話です。なぞは、「春夏秋冬」で真丸から消滅へと変化するものですが、答えは人の寿命の残りではないでしょうか。作品の中に答えは出てきません。

次回予定 平成28年11月11日（金）午後1時～3時

『赤い鳥』昭和9年12月号初出作品「とんび風」「つまらない日」

（「とんび風」・・・『森三郎童話選集 夜長物語』所収）